

グリム童話に登場する魔女の像について

Über das Bild der Hexe in den Märchen der Brüder Grimm

太田 伸 広

要旨：魔女はお年寄りで、ほとんどが森の中の小さな家に住んでいる。魔女の身分や職業、暮らしぶりはほとんどわからない。魔女が真珠や宝石、金銀などの宝を持っている場合は5例で少ない。魔女の魔法たるゆえんはやはり魔法を使うということである。しかし、その目的、使用の相手はほとんどが不明である。魔法の解き方も様々で一定しない。ところが、魔法という武器を持ちながら、魔女が相手に打ち勝つために魔法を用いることはない。それどころか、意外な脆さを見せ、没落する。魔女は殺人など数々の悪事を働く。そのせいか、悲惨な末路を迎える魔女が多い。魔女は山姥や鬼婆と違い、人を食わない。またグリム童話の魔女は、魔女裁判に出てくる「舞踏」、「集会」、「淫行」、箒での飛行、穀物や家畜への危害とも無縁である。さらにグリム童話の魔女は、神学の魔女規定とは違い、悪魔と結託することもない。

はじめに

グリム童話にはよく魔女が登場する。童話の中の魔女は一体どんな人物なのであろうか。これから魔女が登場するグリム童話をすべてとりあげ、魔女はどんなことをするのか、魔女の運命はどうなるのか、魔女の容姿や立ち居振る舞いはどんなものか、魔女の道具や財産はあるのか、魔女に弱点はあるのか、等々、魔女を様々な角度から分析し、魔女の特徴、魔女の像を明らかにしたい。分析の対象は魔女 (Hexe) であるが、魔女に似た女魔法使い (Zauberin)、魔術 (Hexenkünste) を使う女、魔法使い (Hexenmeister) も、魔女の像を明らかにする上で必要と思われる限り、分析の対象とする。また同様の趣旨で、歴史上の魔女や『日本の昔ばなし』に登場する山姥との比較も試みる。

テキストは、BRÜDER GRIMM Kinder- und Hausmärchen Vollständige Ausgabe Mit 184 Illustrationen zeitgenössischer Künstler und einem Nachwort von Heinz Rölleke Artemis & Winkler 1949 Winkler Verlag, München, 19. Auflage 1999 である。参考にした訳は、金田鬼一氏の『グリム童話集』(岩波書店) である。

第1章 グリム童話における魔女の描写

第1節 分析の対象となるグリム童話

グリム童話で魔女が登場するメルヘンは、全部で20篇ある。その内『KHM 179 泉の傍のがちょう番の女』では、父親が ein steinaltes Mütterchen を「es ist eine Hexe. あれは魔女だ

ぞ。」と言っており、本文中でも「*Noch war ihm kein Mensch begegnet, als er plötzlich die alte Hexe erblickte, die am Boden auf den Knien saß und Gras mit einer Sichel abschnitt.* 彼（伯爵の息子）は人に出くわすということはまだありませんでした。ところが突然年老いた魔女の姿が目に入りました。魔女は地面に膝をついて、鎌で草を刈っていました。」と、老婆が魔女だと言われているが、最後になって、「*Soviel ist gewiß, daß die Alte keine Hexe war, wie die Leute glaubten, sondern eine weise Frau, die es gut meinte.* 老婆は人々が思っているような魔女ではなく、善意の賢女だったということだけは確かです。」と、その老婆は賢女だと訂正されているので、魔女として扱わない。それから『KHM 27 プレーメンの町の音楽隊員』で *eine greuliche Hexe* と言われているものは、実際には猫である。また『KHM 65 千種皮』で、料理人が千種皮に「*du bist eine Hexe, Rauhtierchen, und tust immer etwas in die Suppe, davon sie so gut wird, und dem König besser schmeckt, als was ich koche;*」と言うが、それは、千種皮が魔法を使ったとしか思えないほど美味しい料理を作るので、魔女だと言われているだけであり、実際には王様のお姫様である。だから、この2つのメルヘンも分析の対象としない。すると、魔女が登場するメルヘンは、全部で17篇になる。つまり『KHM 1 蛙の王様あるいは鉄のハインリッヒ』、『KHM 11 兄と妹』、『KHM 15 ヘンゼルとグレーテル』、『KHM 22 なぞなぞ』、『KHM 43 トルードおばさん』、『KHM 49 6羽の白鳥』、『KHM 51 鳥っ子』、『KHM 56 最愛の恋人ローラント』、『KHM 60 2人の兄弟』、『KHM 85 黄金の子どもたち』、『KHM 116 青い灯り』、『KHM 122 キャベツ驢馬』、『KHM 123 森の中の老婆』、『KHM 127 鉄のストーブ』、『KHM 135 白い花嫁と黒い花嫁』、『KHM 169 森の家』、『KHM 193 太鼓叩き』である。

女魔法使いが登場するメルヘンは『KHM 12 ラプンツェル』、『KHM 69 ヨリンデとヨリンゲル』、『KHM 134 6人の家来』、『KHM 197 水晶の玉』である。魔術を使う女が登場するメルヘンは『KHM 49 6羽の白鳥』、『KHM 53 白雪姫』、『KHM 141 小羊と小魚』である。

第2節 魔女

1番目は『蛙の王様あるいは鉄のハインリッヒ』である。王様の末のお姫様が、蛙がお姫様と一緒に寝たいと言ったことに腹を立て、蛙を力任せに壁にぶつけると、蛙は美しい優しい目をした王子になる。王子は「*er wäre von einer bösen Hexe verwünscht worden, und niemand hätte ihn aus dem Brunnen erlösen können als sie allein,* 私は悪い魔女に魔法をかけられていたのです。そして私を泉から救うことができたのは貴女をおいて他にいなかったのです。」と言う。このメルヘンで魔女のことが語られるのは、この場面だけである。これでわかることは、魔女は魔法をかけて人を蛙に変身させることができるということである。

2番目は『兄と妹』である。Die böse Stiefmutter aber war eine Hexe, und hatte wohl gesehen, wie die beiden Kinder fortgegangen waren, war ihnen nachgeschlichen, heimlich, wie die Hexen schleichen, und hatte alle Brunnen im Walde verwünscht. このように、兄と妹の継母が魔女で、魔女は森の泉に魔法をかけ、その水を飲む者を虎や狼や子鹿に変えることができる。この話では、妹の忠告を受け、2度も泉の水を飲むのを我慢した兄が、3度目は喉の渇きに我慢がならず、泉の水を飲んで、子鹿になる。次に、魔女は「魔女がよくやるように、こっそりと足音を立てずに兄と妹の後をつけておりました」とあるように、足音を立てずに歩くことが、魔女一般の特徴として描かれている。

次に Die böse Stiefmutter aber, um derentwillen die Kinder in die Welt hineingegangen waren, die meinte nicht anders, als Schwesterchen wäre von den wilden Tieren im Walde zerrissen worden und Brüderchen als ein Rehkalb von den Jägern totgeschossen. とうように、継子虐めをして、兄と妹を家から追い出し、魔法をかけた魔女には、殺人の意図がある。意図だけではない。実際に、王様と結婚した妹が男の赤ちゃんを産むと、魔女は実の娘と二人で、お后様をお風呂で窒息死させる。それから、実の娘をお后様とすりかえる。この廉で、魔女は焼き殺される。魔女の実の娘は、森へ連れて行かれ、野獣に食いちぎられる。魔女が焼き殺され灰になると、魔法をかけられていた兄は人間の姿を取り戻す。ところで、この魔女の継娘は so schön, wie er noch keins gesehen hatte と美しさが強調されているが、対照的に実の娘は「,die häßlich war wie die Nacht und nur ein Auge hatte, 夜のように醜く、目が1つしかなかった。」と描写されている。

3 番目は『ヘンゼルとグレーテル』である。魔女の家は次のように描写されている。daß das Häuschen aus Brot gebaut war und mit Kuchen gedeckt; aber die Fenster waren von hellem Zucker. このように、魔女の家は、屋根はお菓子、窓は白砂糖でできた小さなパンの家である。これは森の奥深く (sie gerieten immer tiefer in den Wald) にある。このパンの家の中から魔女が出てくる。Da ging auf einmal die Türe auf, und eine steinalte Frau, die sich auf eine Krücke stützte, kam herausgeschlichen. ... Die Alte aber wackelte mit dem Kopf und ... Sie faßte beide an der Hand und führte sie in ihr Häuschen. Da ward gutes Essen aufgetragen, Milch und Pfannekuchen mit Zucker, Äpfel und Nüsse. Hernach wurden zwei schöne Bettlein weiß gedeckt, und Hänsel und Gretel legten sich hinein und meinten, sie wären im Himmel.

Die Alte hatte sich nur so freundlich angestellt, sie war aber eine böse Hexe, die den Kindern auflauerte, und hatte das Brothäuslein bloß gebaut, um sie herbeizulocken. Wenn eins in ihre Gewalt kam, so machte sie es tot, kochte es und aß es, und das war ihr ein Festtag. Die Hexen haben rote Augen und können nicht weit sehen, aber sie haben eine feine Witterung, wie die Tiere, und merkens, wenn Menschen herankommen. ... Da packte sie Hänsel mit ihrer dünnen Hand und trug ihn in einen kleinen Stall und sperrte ihn mit einer Gittertüre ein: ... , und die Alte, die trübe Augen hatte, konnte es nicht sehen, ... die Alte ... krabbelte heran und steckte den Kopf in den Backofen. このように、ここに登場する魔女は、石のように年を取っており、撞木杖をつけて、頭をぐらぐらさせながら、足音を立てずに (忍び足で) 出てくる。そして家をかじって食べているヘンゼルとグレーテルの手を取って家の中に入れる。魔女の家には、牛乳、砂糖入りのパン菓子、りんご、胡桃といったご馳走がある。白い布がかけられた綺麗な寝台もある。パンの家も子供たちを誘き寄せるために作ってある。おとりに釣られて子供たちがやってくると、魔女は子どもを殺して煮て食う。魔女はグレーテルもパン焼き窯で焼いて食べようとするが、幼いグレーテルに騙され、パン焼き窯で焼き殺される。(und die gottlose Hexe mußte elendiglich verbrennen.) この魔女は赤く濁った目をしており、遠くは見えないが、嗅覚は動物のように鋭い。だから、人が近づいてくると、嗅覚で分る。魔女の手は枯れ木のようになりがりに瘦せている。そして蟹が這うような格好をしてやってくる。この魔女は、真珠や宝石をたくさん持っている。

4 番目は『なぞなぞ』である。ある王子が大きな森の中で道に迷う。森の中で小さな家の方に歩いて行く娘に王子が宿を頼んだ時のことである。Das Mädchen seufzte und sprach 'meine

Stiefmutter treibt böse Künste,' ... Da merkte er wohl, daß er zu dem Haus einer Hexe gekommen war, ... Die Alte saß auf einem Lehnstuhl beim Feuer und sah mit ihren roten Augen die Fremden an. 'Guten Abend,' schnarrte sie これを見ると、魔女は悪い術を使い、赤い目をしており、声はだみ声である。そして継母である。魔女は、der Diener, der seinen Sattel festschnallen mußte, war allein noch zugegen, als die böse Hexe mit dem Trank kam. 'Das bring deinem Herrn,' sagte sie, aber in dem Augenblick sprang das Glas, und das Gift spritzte auf das Pferd, und war so heftig, daß das Tier gleich tot hinstürzte. と、毒入りの飲み物を作って、王子を殺そうとする。だからこの魔女は人殺しである。次に、Sie waren aber in eine Mördergrube geraten, und in der Dunkelheit kamen zwölf Mörder und wollten die Fremden umbringen und berauben. Ehe sie sich aber ans Werk machten, setzten sie sich zu Tisch, und der Wirt und die Hexe setzten sich zu ihnen, und sie aßen zusammen eine Schüssel mit Suppe, in die das Fleisch des Raben gehackt war. というように、この魔女は、強盗殺人を行う人殺したちの仲間のようなのである。ところが、この魔女は自分の作った毒で、人殺したちと一緒に死んでしまう。

5番目は『トルーデおばさん』である。ある小さな女の子は、両親が行っては駄目と注意するのも聞かず、トルーデおばさんの所へ出かけて行く。女の子が「ich sah durchs Fenster und sah Euch nicht, wohl aber den Teufel mit feurigem Kopf. 火の玉の頭の悪魔がはっきり見えたんだもの」と言うと、トルーデおばさんは「so hast du die Hexe in ihrem rechten Schmuck gesehen:それじゃ、お前はちゃんと着飾った魔女を見たのだよ」と答える。「火の玉の頭の悪魔」とは自分のことで、彼女は自分で自分のことを魔女だと認める。そしてトルーデおばさんは「ich habe schon lange auf dich gewartet und nach dir verlangt, du sollst mir leuchten. お前をもう長いこと待っていたよ。お前が欲しかったんだ。私のために輝いてもらわねばね。」と言い、女の子を丸太に変え、火の中へ放り込み、側に座って体を温めながら「das leuchtet einmal hell! なんとまあ明るいこと!」と言う。このように、魔女は人を変身させ、平気で殺す。しかもそれを喜んでいる。このトルーデおばさんのことを、女の子の両親が「'die Frau Trude ist eine böse Frau, die gottlose Dinge treibt,' トルーデおばさんは、あくどいことをする悪い女だ」と言っているように、魔女は『ヘンゼルとグレーテル』と同じく「gottlos」らしい。gottlosは、「あくどい」という意味だけでなく、「神をも恐れぬ、無信仰の、無神論の」という意味もあり、そう言われることは、キリスト教社会に住む者にとっては、最大の侮辱であり、耐え難いことである。このレッテルを貼られた者は、キリスト教社会で暮らすことは非常に困難である。逆に、そういうレッテルを貼る方は、その人をキリスト教社会から追放してやろう、抹殺してやろうという気持ちがある。

第6番目は『6羽の白鳥』である。王様がある大きな森で狩をしていて道に迷った時、老婆に出くわした。老婆は魔女で Da sah er eine alte Frau mit wackelndem Kopfe, die auf ihn zukam; das war aber eine Hexe. と、頭をぐらぐらさせながら王様の方にやってきた。そして魔女は、自分の娘と婚約するならば、森から出る道を教えてやると言う。

魔女の娘は、'Ich habe eine Tochter,' sagte die Alte, 'die so schön ist, wie Ihr eine auf der Welt finden könnt,' ... die Alte führte ihn zu ihrem Häuschen, wo ihre Tochter beim Feuer saß. Sie empfing den König, als wenn sie ihn erwartet hätte, und er sah wohl, daß sie sehr schön war, aber sie gefiel ihm doch nicht, und er konnte sie ohne heimliches Grausen nicht ansehen. と、

この世に並ぶものが他にいない位美しい。しかし王様は、娘をまじまじと見ると、心の中でぞっとするような恐ろしさを感じた。この娘は母親から魔術を教わっており、魔術を使うことができる。それは、*Da warf sie über ein jedes eins von den Hemdchen, und wie das ihren Leib berührt hatte, verwandelten sie sich in Schwäne und flogen über den Wald hinweg.* というように、肌着の中に魔法を縫い込み、それを投げかけて、子供（王子）たちを白鳥に変える術である。白鳥からもとの人間の姿に戻す方法は、白鳥の妹が6年間話もせず、笑いもせず、友禪菊で兄さんたちの肌着を編むという試練に耐えることである。

第7番目は『鳥っ子』である。山番が森の木の上にいた子供（鳥っ子）を拾って家に連れて帰る。山番の家には料理人の婆さん（魔女）がいる。魔女は *'da koche ich das Wasser, und wenns im Kessel siedet, werfe ich den Fundevogel nein, und will ihn darin kochen.'* とか *Wie nun das Wasser im Kessel kochte, ging die Köchin in die Schlafkammer, wollte den Fundevogel holen und ihn hineinwerfen.* と、鍋に湯を沸かし、鳥っ子を煮ようとする。山番の子レーンちゃんは鳥っ子に魔女の企みを教え、鳥っ子を誘って家から逃げ出す。追っ手の下男に捕まりそうになると、レーンちゃんは鳥っ子を小さい薔薇の木に変え、自分は小さい薔薇の花になり、追跡をかかわす。2度目の追跡は、鳥っ子を教会に変え、自分はシャンデリアになって、追っ手から逃れる。3度目は、鳥っ子を池に変え、自分は鴨に変身する。そして *Aber die Ente kam schnell geschwommen, faßte sie mit ihrem Schnabel beim Kopf, und zog sie ins Wasser hinein: da mußte die alte Hexe ertrinken.* と、追って来た魔女が池の水を飲み干そうとして、池の側に腹這いになった時、鴨は魔女を池の中に引きずり込む。魔女は溺れ死ぬ。

第8番目は『最愛の恋人ローラント』である。このメルヘンは、最初から魔女が登場する。*Es war einmal eine Frau, die war eine rechte Hexe, und hatte zwei Töchter, eine häßlich und böse, und die liebte sie, weil sie ihre rechte Tochter war, und eine schön und gut, die haßte sie, weil sie ihre Stieftochter war.* このように、この魔女は「本当の魔女」とされている。魔女には、「醜く悪い」実の娘と「美しく善良な」継娘がいる。ある時 *Zu einer Zeit hatte die Stieftochter eine schöne Schürze, die der andern gefiel, so daß sie neidisch war und ihrer Mutter sagte, sie wollte und mußte die Schürze haben.* と、実の娘が継娘の持っている美しい前掛けを欲しがる。すると、*'Deine Stiefschwester hat längst den Tod verdient, heute nacht, wenn sie schläft, so komm ich und haue ihr den Kopf ab'* と、魔女は継娘が寝ている間に鉞で殺す計画を立てる。それを盗み聞きした継娘は、実の娘を自分がいつも寝る場所に引きずり寄せ、実の娘の寝場所で寝たふりをする。そのため、*dann faßte sie die Axt mit beiden Händen, hieb und hieb ihrem eigenen Kinde den Kopf ab.* とあるように、魔女は実の娘を鉞で滅多打ちにし、首を刎ねてしまう。魔女は、継娘を仕留めたと思い、立ち去る。

その間に、継娘は魔女の魔法の杖を取って、最愛の恋人ローラントと一緒に逃げる。ところが、この魔女は遠く世界を見渡すことができる (*da sie weit in die Welt schauen konnte*)。そればかりか、この魔女は1マイル長靴を持っており、一足で1マイルも進むことができる。追いつかれた娘は、魔法の杖で、ローラントを湖に、自分を鴨に変え、魔女から逃れる。あくる朝、娘は美しい花に変身し、ローラントをバイオリン弾きに変える。そこに魔女がやって来る。*Als sie nun mit Hast in die Hecke kroch und die Blume brechen wollte, ... so fing er an aufzuspielen, und, sie mochte wollen oder nicht, sie mußte tanzen, denn es war ein Zaubertanz. Je schneller er spielte, desto gewaltigere Sprünge mußte sie machen, und die Dornen rissen ihr die*

Kleider vom Leibe, stachen sie blutig und wund, und da er nicht aufhörte, mußte sie so lange tanzen, bis sie tot liegen blieb. このように、魔女が花を折り取ろうとすると、ローラントはバイオリンを弾く。すると、魔女はバイオリンに合わせて踊り出す。早くバイオリンを弾くと、魔女は高く飛び上がって踊り、茨に服を剥ぎ取られ、血だらけになって傷つき、とうとう倒れて死んでしまう。

第9番目は『2人の兄弟』である。竜への人身御供になるお姫様を救い、そのお姫様をもらった若い王様（弟）は、魔法の森の奥深くで、道に迷い、夜を明かそうと、焚火をする。すると、魔女が現れる。Bald darauf hörte er wieder ein Ächzen wie von oben her, da blickte er in die Höhe und sah ein altes Weib auf dem Baum sitzen, das jammerte in einem fort ‘hu, hu, hu, was mich friert!’ ... Sie aber sagte ‘nein, deine Tiere beißen mich.’ ... Sie war aber eine Hexe und sprach ‘ich will dir eine Rute von dem Baum herabwerfen, wenn du sie damit auf den Rücken schlägst, tun sie mir nichts.’ Da warf sie ihm ein Rütlein herab, und er schlug sie damit, alsbald lagen sie still und waren in Stein verwandelt. このように、魔女は年を取っており、木の上に座って、「ブルブルブル。なんと寒いんだ！」とうめき声をあげている。そして動物たち（兎、狐、狼、熊、ライオン）が噛みつきはしないかと怖がる。そして魔女は枝鞭を落す。若い王様がそれで動物たちの背中を叩くと、全部石になる。それから、魔女は木から下りてきて、若い王様も枝鞭で石にする。魔女は笑って、石になった王様と動物を引きずって行き、溝の中に入れる。この溝の中にはすでの多くの石がころがっていた。

今度は兄が弟を救いに魔法の森に出かけて行く。兄も弟と同じように木の上にいる魔女に行く。兄は猟銃で魔女を撃つ。しかし、魔女は鉛の弾など平ちゃらで、かん高い声で笑う。ところが、兄が銀の弾を猟銃に込めて撃つと、魔女は悲鳴をあげて木の上から落ちる。魔女の術も銀の弾には無力であった。魔女は、兄に ich ... werfe dich ins Feuer. と脅され、石にされていた弟や動物たちを枝鞭で元の姿に戻す。それから、双子の兄弟は魔女を縛り上げ、火の中にくべる。魔女が焼け死ぬと、森はひとりでのけり、日が射して明るくなる。

ところで、この魔女は、兄に「老いぼれの魔女め」となじられたり、「老いぼれの尾長猿 alte Meerkatze」となじられている。魔女は蔑称ともなっている。

第10番目は『黄金の子どもたち』である。黄金の子供は、森の中で牡鹿を追っていて、魔女の家に行き着く。その時の魔女の様子である。Und als das Goldkind sich umsah, so stand er vor einem kleinen Haus, darin saß eine Hexe. Er klopfte an, und ein Mütterchen kam heraus ... und ein Hündlein, das mit ihr aus dem Haus gekommen war, bellte dabei den Mann heftig an. ‘Willst du schweigen, du böse Kröte,’ sprach er, ‘sonst schieß ich dich tot.’ Da rief die Hexe zornig, ‘was mein Hündchen willst du töten!’ und verwandelte ihn alsbald, daß er dalag wie ein Stein, このように、森の中の小さな家をノックすると、お婆さんの魔女が出てくる。魔女と一緒に家から出てきた子犬が吠えるので、黄金の子供が静かにしないと撃ち殺すぞと言うと、魔女は怒って、黄金の子供をすぐさま石に変える。

黄金の百合が倒れたので、弟は、兄の身に何かが起こったことがわかり、森へ兄を助けに出かけて行く。すると、魔女が家から出てきて、Die alte Hexe kam aus ihrem Haus, rief ihn an und wollte ihn auch berücken, aber er näherte sich nicht, sondern sprach ‘ich schieße dich nieder, wenn du meinen Bruder nicht wieder lebendig machst.’ Sie rührte, so ungerne sies auch tat, den Stein mit dem Finger an, und alsbald erhielt er sein menschliches Leben zurück. と、魔女は、

弟も罠にかけようとするが、弟は魔女に近づかず、「兄をもう一度生き返らせなければ、お前を撃ち殺すぞ」と脅す。すると、魔女はしぶしぶ石に指で触る。すると石は人間になる。不思議なことに、この魔女は何の危害も加えられない。

第11番目は『青い灯り』である。除隊になった一文無しの兵隊さんが途方にくれて、歩いていて、森の中へ入り込む。灯の方へ行くと、家がある。それは魔女の家だった。Als die Finsternis einbrach, sah er ein Licht, dem näherte er sich und kam zu einem Haus, darin wohnte eine Hexe. 'Gib mir doch ein Nachtlager und ein wenig Essen und Trinken,' sprach er zu ihr, 'ich verschmachte sonst.' 'Oho!' antwortete sie, 'wer gibt einem verlaufenen Soldaten etwas? doch will ich barmherzig sein und dich aufnehmen, wenn du tust, was ich verlange.' このように、魔女は、宿と飲食を頼む兵隊さんに対して、言うことをやってくれるならば、泊めてやる、と憐れみ深い態度を示す。魔女の要求は、菜園を耕すこと、馬車一台分の木材を割り、小さな薪を作ること、3つ目の要求が奇妙なのだが、家の裏の干からびた井戸から青く燃えている灯りを拾い上げることである。最後の仕事の時、魔女は兵隊さんを籠に入れて井戸の下に下ろす。魔女は、兵隊さんが青い灯りを見つけたので籠を上げる。兵隊さんは、魔女が青い灯りだけを取ろうとしたので、上に上がるまでは渡さないと言う。すると、魔女は怒って籠を井戸の下へ落とす。魔女は宝物や黄金を地下に隠している。

魔女の持ち物と思われる青い灯りで、煙草に火をつけると、小人が出て来る。この小人は兵隊さんの言うことは何でもする。兵隊さんは、小人に助けってもらって地上に出ると、小人に「あの年老いた魔女を縛り上げ、法廷へ連れて行け」と言う。それからしばらくして、魔女が山猫に乗って、恐ろしい叫び声をあげながら、風のような速さで通り過ぎていく。しばらくすると、小人が帰って来て、「魔女はもう絞首台にぶら下がっているよ」と言う。

第12番目は『キャベツ驢馬』である。Es trug sich zu, daß er (ein junger Jäger) eines Tages durch einen dicken Wald kam, und wie der zu Ende war, lag in der Ebene vor ihm ein ansehnliches Schloß. In einem Fenster desselben stand eine Alte mit einer wunderschönen Jungfrau und schaute herab. Die Alte aber war eine Hexe und sprach zu dem Mädchen 'dort kommt einer aus dem Wald, der hat einen wunderbaren Schatz im Leib, den müssen wir darum berücken, mein Herzensstöchterchen: uns steht das besser an als ihm. Er hat ein Vogelherz bei sich, deshalb liegt jeden Morgen ein Goldstück unter seinem Kopfkissen.' このように、森の向こうの平原に立派なお城があって、そこに年老いた魔女と驚くほど美しい乙女が住んでいる。魔女はどうか、若い狩人のお腹の中に鳥の心臓があり、その心臓のお陰で、狩人が毎朝金貨を枕元に授かるということを知っている。そして娘を脅して、それを騙し取ろうとする。狩人は魔女の娘に首っ丈で、他のことはもう何も頭に入らず、娘の顔色ばかり伺い、娘の要求することは何でもするようになってしまう。これを魔女は利用する。Sie richteten einen Trank zu, und wie der gekocht war, tat sie ihn in einen Becher und gab ihn dem Mädchen, das mußte ihn dem Jäger reichen. Sprach es 'nun, mein Liebster, trink mir zu.' Da nahm er den Becher, und wie er den Trank geschluckt hatte, brach er das Herz des Vogels aus dem Leibe. Das Mädchen mußte es heimlich fortschaffen und dann selbst verschlucken, denn die Alte wollte es haben. このように、魔女は何か飲み物を調合し、杯に入れて娘に渡す。娘は「ねえ、最も愛しているあなた、私のために乾杯して」と言って、それを狩人に飲ませます。狩人がそれを飲むと、鳥の心臓を吐き出す。娘は密かにそれを持ち去り、飲み込む。このようにして、魔女は狩人の鳥の心臓

（金貨）を自分のものにする。

次に魔女は、肩に羽織ればどこへでも行ける狩人の魔法の外套も取ろうと企てる。これには魔女の娘が反対する。ここでも、魔女は狩人が持っているものが魔法の外套であることを知っている。では、魔女はその魔法の外套を騙し取るのに、どんな陰謀を巡らすか。魔女に脅された娘は、とても悲しげな様子をして、素敵な宝石のあるざくろ石山に行きたい、と狩人に言う。狩人は外套を羽織り、娘を抱えて、ざくろ石山へ行きたいと願掛けする。すると、すぐさまざくろ石山へ着く。ところが、魔女は Nun hatte es aber die Alte durch ihre Hexenkunst bewirkt, daß dem Jäger die Augen schwer wurden. Er sprach zu dem Mädchen 'wir wollen ein wenig niedersitzen und ruhen, ich bin so müde, daß ich mich nicht mehr auf den Füßen erhalten kann.' Da setzten sie sich, und er legte sein Haupt in ihrern Schoß und schlief ein. と、狩人が眠くなるように魔術をかけていた。娘は眠った狩人から魔法の外套を取り、家へ帰りたいと願う。するとすぐに家に帰ることができる。

ざくろ石山の頂上から雲に乗って菜園に降りた狩人は、自分の体験から、食べると驢馬になるキャベツと食べると驢馬から人間の姿に戻るキャベツがあることを知る。狩人はこの2種類のキャベツを持って、娘のいるお城へと向かう。そして狩人は、魔女と下女と娘をうまく騙してキャベツを食べさせ、驢馬にする。それから、驢馬を粉屋に連れて行き、魔女の驢馬には1日1回の餌と3回の殴打を与えるように頼む。数日後に魔女の驢馬は死んでしまう。

第13番目は『森の中の老婆』である。女の子は白い小鳩に言われたとおり、魔女の家に行く。Das Mädchen ging zu dem Häuschen und trat zu der Türe ein: da saß eine Alte, die machte große Augen, wie sie es erblickte, und sprach 'guten Tag, mein Kind.' Es gab ihr aber keine Antwort und ging auf die Türe zu. 'Wo hinaus?' rief sie und faßte es beim Rock und wollte es festhalten, 'das ist mein Haus, da darf niemand herein, wenn ichs nicht haben will.' Aber das Mädchen schwieg still, machte sich von ihr los und ging gerade in die Stube hinein. Da lag nun auf dem Tisch eine übergroße Menge von Ringen, die glitzten und glimmerten ihm vor den Augen: es warf sie herum und suchte nach dem schlichten, konnte ihn aber nicht finden. Wie es so suchte, sah es die Alte, wie sie daherschlich und einen Vogelkäfig in der Hand hatte und damit fortwollte. Da ging es auf sie zu und nahm ihr den Käfig aus der Hand, und wie es ihn aufhob und hineinsah, saß ein Vogel darin, der hatte den schlichten Ring im Schnabel. Da nahm es den Ring und lief ganz froh damit zum Haus hinaus und dachte, das weiße Täubchen würde kommen und den Ring holen, aber es kam nicht. 老婆（魔女）は、女の子を見ると、大きな目をする。魔女はきらきら輝く指輪、輝く宝石で飾った指輪を沢山持っている。女の子は、飾り気のない指輪を魔女から奪って持って帰る。魔女は、その指輪がないと魔力を発揮することができない。魔力が消え、王子は Und auf einmal schlangen sich die Zweige um es herum, und waren zwei Arme, und wie es sich umsaß, war der Baum ein schöner Mann, der es umfaßte und herzlich küßte と、立ち木から人間の姿に戻る。そして王子は「'du hast mich erlöst und aus der Gewalt der Alten befreit, die eine böse Hexe ist. Sie hatte mich in einen Baum verwandelt, und alle Tage ein paar Stunden war ich eine weiße Taube, und so lang sie den Ring besaß, konnte ich meine menschliche Gestalt nicht wiedererhalten.' あなたは私を救い出してくれました。悪い魔女のあの老婆の魔力から私を解放してくれたのです。あの女は私を木に変えてしまいました。そして毎日数時間私は白い鳩になっておりました。魔女がああ指輪を持っている限り、私は人間の

姿には戻れなかったのです。」と言う。魔女の魔法で木に変えられていたのは王子だけでない。召使たちや馬も木に変えられていた。彼らも王子と一緒に魔法から解放された。

第14番目は『鉄のストーブ』である。Zur Zeit, wo das Wünschen noch geholfen hat, ward ein Königssohn von einer alten Hexe verwünscht, daß er im Walde in einem großen Eisenofen sitzen sollte. Da brachte er viele Jahre zu, und konnte ihn niemand erlösen. このように、ある王子が年老いた魔女に魔法をかけられ、森の中のある大きな鉄のストーブの中に閉じ込められ、そこで何年も過ごしたが、誰も彼を救い出すことができなかった。しかし、森の中で道に迷ったお姫様が短刀で鉄のストーブを削り、王子を救出する。次に、So gelangten sie endlich zu dem alten kleinen Häuschen, aber wie sie hineintraten, wars ein großes Schloß: die Itschen waren alle erlöst und lauter Königskinder und waren in voller Freude. とあるように、森の中の小さな家は、婚約した王子と王女が入ると、大きなお城に変わり、ひき蛙たちも皆救われ、人間の姿を取り戻す。彼らは王様の子供たちである。この魔法も、王子を鉄のストーブに閉じ込めた魔女の仕業と関係がありそうである。

第15番目は『白い花嫁と黒い花嫁』である。年老いた魔女が実の娘と継娘を連れて餌用の草を刈りに行く。魔女は、神様に道を尋ねられると「道を知りたいなら自分で探さない。」と答え、実の娘は「道が見つからないで不安なら、案内人を連れて行きなさいよ。」と答える。これに腹を立てた神様は、2人が夜のように黒くなり、罪のように醜くなれと呪う。これに対して、親切に道案内をした継娘には、神様は、真昼のように白く美しくなり、死後にとこしえの天国に行けることを約束し、決して空になることのない財布を与える。

継娘の美しさに惚れた王様は、娘をお城に迎え、結婚しようとする。実の娘はこれを妬み、母親の魔女にせつつく。Und durch ihre Hexenkünste trübte sie dem Kutscher die Augen, daß er halb blind war, und der Weißen verstopfte sie die Ohren, daß sie halb taub war. このように、魔女は、魔術を使って、馬車に乗って花嫁としてお城へ向かう継娘を半聾にし、継娘の兄の御者を半盲目にする。それから、魔女は継娘の豪華な黄金の衣装と黄金の帽子を脱がせて実の娘に着せ、実の娘と二人で継娘を川の中に突き落とす。こうして、魔女は王様の白い花嫁を実の娘とすり替える。しかし、王様は黒い花嫁の底抜けの醜さに怒る。そこで、魔女は Die alte Hexe aber wußte den König doch so zu bestriicken und durch ihre Künste ihm die Augen zu verblenden, daß er sie und ihre Tochter behielt, ja daß sie ihm ganz leidlich vorkam und er sich wirklich mit ihr verheiratete. と、魔術を用いて、王様の目を眩まし、黒い花嫁と結婚させてしまう。殺された白い花嫁は白い鴨に変身する。王様はその鴨の首を切ると、鴨は美しい娘の姿に戻る。娘は魔女たちの悪事を暴く。魔女と実の娘は、衣服を剥ぎ取られ丸裸にされて、釘の出た樽に入れられ、馬に世界中引きずり回される。

第16番目は『森の家』である。このメルヘンでは、魔女は王子の話の中で登場するだけである。‘ich bin ein Königssohn und war von einer bösen Hexe verwünscht worden, als ein alter, eisgrauer Mann in dem Wald zu leben: niemand durfte um mich sein als meine drei Diener in der Gestalt eines Hühnchens, eines Hähnchens und einer buten Kuh. Und nicht eher sollte die Verwünschung aufhören, als bis ein Mädchen zu uns käme, so gut von Herzen, daß es nicht gegen die Menschen allein, sondern auch gegen die Tiere sich liebeich bezeugte, und das bist du gewesen, und heute um Mitternacht sind wir durch dich erlöst und das alte Waldhaus ist wieder in meinen königlichen Palast verwandelt worden.’ このように、王子は悪い魔女に魔法をかけ

られ、白髪の爺さんにされ、森の中で暮らすはめになる。側にいることが許されたのは、小さな雌鶏と小さな雄鶏とまだら模様の牝牛にされた3人の召使だけである。王子が暮らしている古い森の家ももとは王宮である。これも魔女に変えられたものに違いない。この魔女の魔法は、人間だけでなく動物に対しても優しい心の善良な娘が来ることで解ける。

第17番目は『太鼓叩き』である。ある日の夕方、若い太鼓叩きが湖の岸においてあった3枚の白い亜麻布の一つを持って帰って寝ようとする、かすかな声が「ich bin die Tochter eines mächtigen Königs, aber ich bin in die Gewalt einer Hexe geraten und bin auf den Glasberg gebannt. Jeden Tag muß ich mit meinen zwei Schwestern im See baden, aber ohne mein Hemdchen kann ich nicht wieder fortfliegen.’ 私はある強力な王様の娘です。ある魔女の魔力にとらわれ、ガラスの山の上に封じ込められています。毎日2人の姉妹と一緒に湖で水浴びをしなければなりません、私の肌着がなければ、もう飛び去ることができません。」と訴えかけてくる。その魔女はというと、Auf dem Berg (Glasberg) oben war eine Ebene, da stand ein altes steinernes Haus, und vor dem Haus lag ein großer Fischteich, dahinter aber ein finsterner Wald. ... Als er zum drittenmal geklopft hatte, öffnete eine Alte mit braunem Gesicht und roten Augen die Türe; sie hatte eine Brille auf ihrer langen Nase und sah ihn scharf an, とあるように、褐色の顔で、赤い目をしている。そして長い鼻の上に眼鏡をかけ、鋭い目つきで太鼓叩きをじっと見る。魔女の住んでいる家は古い石の家で、ガラスの山の上にある。ガラスの山の上は平らである。そこには魚のいる池があり、その後ろには真っ暗な森がある。後の描写に出てくるが、この魔女はかりがりに痩せた指をしている。

魔女が太鼓叩きを泊めてやる条件として出したものは次の3つのことである。1つは、晩までに、指ぬきで外の池の水をかえ、中にある魚をすべて種類と大きさにより分けて並べること、2つは、晩までに、鉛の斧とブリキの鎚と楔で、森の木を全部切り倒し、薪にしておよそ3立方メートルくらいの小さな山に積み上げること、3つは、すべての薪を一山にして燃やすことである。これらは、太鼓叩きが寝ている間に、古い石の家の中から出てきた美しい若い女性（王女）が、魔法の指輪ですべてやってくれる。王女は、一つ一つの課題をやり遂げた後に、太鼓叩きに奇妙な注文をつける。例えば、1つ目の難題を解決した後では「‘Dann wirf ihr (der Alten) den Fisch ins Angesicht und sprich ‘der soll für dich sein, alte Hexe.’ 1匹だけ残った魚を老婆の顔に投げつけ『これはお前のだ、魔女のばばあ』と言いなさい」と言い、次は「‘so gib ihr (der Alten) damit einen Schlag und sprich ‘der soll für dich sein, du Hexe.’ たった一本残った太い枝で老婆を殴り、『この魔女め、これはお前のだ』と言いなさい」と言い、最後は「両手で魔女をつかんで燃えている炎の真ん中に投げ込みなさい」と過激なことを言う。太鼓叩きは言われた通りに振舞う。この時の魔女の反応はというと、Abends kam die Alte, und als sie die Frage getan hatte, so warf er ihr den Fisch ins Gesicht. Sie stellte sich, als merkte sie es nicht, und schwieg still, aber sie blickte ihn mit boshafte Augen an. と、魚を投げつけられても、そ知らぬふりをして、黙ったまま太鼓叩きを陰険な目つきでじっと見る。そして‘Für dich, du Hexe,’ antwortete er (der Trommler) und gab ihr einen Schlag damit. Aber sie tat, als fühlte sie es nicht, lachte höhnisch と、太い木の枝で叩かれても、魔女は何も感じないようなそぶりをし、馬鹿にしたように笑う。だが最後には、魔女は焼き殺される。また、und die Alte kam herangeschlichen, ‘hu! mich friert,’ sagte sie と、魔女はこっそりと足音を立てずに忍び寄ってくる。笑いは憎々しげで (giftig) ある。

ところで、魔女そのものの描写ではないが、da packte er die Alte mit beiden Händen, hob sie in die Höhe und warf sie den Flammen in den Rachen, die über ihr zusammenschlugen, als freuten sie sich, daß sie eine Hexe verzehren sollten. のように、燃え盛る炎は大きな口を開け、魔女を食べることになったことを喜んでいのかのように、魔女を飲み込み、口を閉じたとある。炎を人格化した表現とはいえ、魔女を焼き殺すことはまさに喜びなのである。この魔女も金や銀、宝石などの宝物を沢山集めている。

第3節 女魔法使い、魔術を使う女

1 女魔法使い

第1番目は『ラプンツェル』である。ある夫婦が住んでいる家の裏に見事な菜園があった。しかしそれは「大きな力」を持っている女魔法使いの菜園なので、そこへ入る勇気のある者は誰もいない。しかし妻がちしゃ（ラプンツェル）を非常に欲しがるので、夫はその菜園に入ってちしゃを取り、妻に食べさす。妻がさらに欲しがるので、夫はもう一度菜園に入る。すると、女魔法使いが目の前に立っており、「‘Wie kannst du es wagen,’ sprach sie mit zornigem Blick, ‘in meinen Garten zu steigen und wie ein Dieb mir meine Rapunzeln zu stehlen? Das soll dir schlecht bekommen.’ 怒った目つきで『私の菜園に入って、どろぼうみたいに私のちしゃを盗むなんて、よくもそんなことができたもんだね。そんなことをすると、とんだ目に会うよ。』」と言う。しかし、夫が実情を話すと、女魔法使いは怒りを和らげ、「‘Verhält es sich so, wie du sagst, so will ich dir gestatten, Rapunzeln mitzunehmen, soviel du willst, allein ich mache eine Bedingung: du mußt mir das Kind geben, das deine Frau zur Welt bringen wird. Es soll ihm gut gehen, und ich will für es sorgen wie eine Mutter.’ お前さんが言うような事情であれば、欲しいだけちしゃを持って帰ってもいいよ。しかし条件が一つある。奥さんが産む子を私によこすことだ。子供は私が元気に育ててあげるし、母親のように世話をしてあげる。」と言う。夫は怖くなってその条件を呑む。妻が子供を産むと、すぐに女魔法使いが現われ、ラプンツェルという名前を付け、子供を連れ去る。

ラプンツェルは、女魔法使いに育てられ、お日様の下で最も美しい女の子になる。そしてラプンツェルが12歳になると、女魔法使いはラプンツェルを森の中の塔に閉じ込める。

何年か経ったある時のこと、女魔法使いは、ラプンツェルの口から、若い王子が塔の中のラプンツェルのもとへ通ってきていることを知り、怒鳴る。「‘Ach du gottloses Kind,’ rief die Zauberin, ‘was muß ich von dir hören, ich dachte, ich hätte dich von aller Welt geschieden, und du hast mich doch betrogen!’ ああ、お前は何というふしだらな（罪深い）子だ。何と何を聞かされるのか。お前を完全に世間から隔離しておいたと思ったのに。この私を騙しよって。」それから、In ihrem Zorne packte sie die schönen Haare der Rapunzel, schlug sie ein paarmal um ihre linke Hand, griff eine Schere mit der rechten, und ritsch, ratsch waren sie abgeschnitten, und die schönen Flechten lagen auf der Erde. Und sie war so unbarmherzig, daß sie die arme Rapunzel in eine Wüstenei brachte, wo sie in großem Jammer und Elend leben mußte. と、女魔法使いは、激怒してラプンツェルの美しい髪の毛をはさみでジョキジョキと切り、彼女を荒野に置いてきぼりにする。

王子が塔にやって来ると、女魔法使いは、悪意を秘めた毒々しい目つきで（mit bösen und giftigen Blicken）王子を見つめ、「‘Aha,’ rief sie höhnisch, ‘du willst die Frau Liebste holen,

aber der schöne Vogel sitzt nicht mehr im Nest und singt nicht mehr, die Katze hat ihn geholt und wird dir auch noch die Augen auskratzen. Für dich ist Rapunzel verloren, du wirst sie nie wieder erblicken.' ほらほら、最愛の奥さんを連れて行くつもりだろうがね、美しい鳥はもうこの巣の中にはいないよ。もう歌もさえずることはないよ。猫がさらって行ったからだよ。その猫はね、お前の目玉も引っかき出すかもしれないよ。ラプンツェルはお前さんにとっては死んだも同然だ。もう2度と姿を見ることはないだろうよ。」とあざけりながら叫ぶ。

第2番目は『ヨリンデとヨリンゲル』である。このメルヘンではいきなり女魔法使いが登場する。Es war einmal ein altes Schloß mitten in einem großen dicken Wald, darinnen wohnte eine alte Frau ganz allein, das war eine Erzzauberin. Am Tage machte sie sich zur Katze oder zur Nachteule, des Abends aber wurde sie wieder ordentlich wie ein Mensch gestaltet. Sie konnte das Wild und die Vögel herbeilocken, und dann schlachtete sie, kochte und briet es. Wenn jemand auf hundert Schritte dem Schloß nahekam, so mußte er stille stehen und konnte sich nicht von der Stelle bewegen, bis sie ihn lossprach: wenn aber eine keusche Jungfrau in diesen Kreis kam, so verwandelte sie dieselbe in einen Vogel, und sperrte sie dann in einen Korb ein, und trug den Korb in eine Kammer des Schlosses. Sie hatte wohl siebentausend solcher Körbe mit so raren Vögeln im Schlosse. このように、女魔法使いは、年寄りで、ある大きなこんもりとした森の真ん中の古いお城にたった一人で住んでいる。この女魔法使いは、魔法使いでも大魔法使いである。女魔法使いは昼は猫や梟に姿を変え、夜にはまた人間の姿に戻る。女魔法使いは野生の動物や鳥をおびき寄せ、殺して煮たり焼いたりする。人がお城から百歩くらいのところまで近寄ると、その場所から動けなくなる。この圏内に入って来る者が清らかな乙女だと、女魔法使いはその子を鳥に変え、籠に入れてお城の部屋の中に運んで行く。このような鳥かごがすでに7,000個もある。

圏内に入ったヨリンデも夜鳴き鷹に変えられ、お城に連れて行かれる。ヨリンゲルは金縛りにあって動けなくなる。女魔法使いは Die Eule flog in einen Strauch, und gleich darauf kam eine alte krumme Frau aus diesem hervor, gelb und mager: große rote Augen, krumme Nase, die mit der Spitze ans Kinn reichte. Sie murmelte, fing die Nachtigall und trug sie auf der Hand fort. と、梟から、黄色で痩せこけ、先が顎まで届く鉤鼻の、大きな赤い目をした年老いた猫背の女になる。この女はつぶやきながら夜鳴き鷹をつかみ、手の上に乗せ、立ち去る。

ヨリンゲルが夢に見た血のような赤い花を手を持っていると、金縛りにあうこともなく、女魔法使いのお城に入ることができる。Er ging und fand den Saal, darauf war die Zauberin und fütterte die Vögel in den siebentausend Körben. Wie sie den Joringel sah, ward sie böß, sehr böß, schalt, spie Gift und Galle gegen ihn aus, aber sie konnte auf zwei Schritte nicht an ihn kommen. このように、広間に女魔法使いがいて、7,000もの籠に入った鳥に餌をやっている。彼女はヨリンゲルを見ると、大変怒り、ののしり、毒や胆汁をヨリンゲルに吐きかける。しかし、彼女はヨリンゲルに二歩以内に近づくことができない。彼女は Indem er so zusah, merkte er, daß die Alte heimlich ein Körbchen mit einem Vogel wegnahm und damit nach der Türe ging. Flugs sprang er hinzu, berührte das Körbchen mit der Blume und auch das alte Weib: nun konnte sie nichts mehr zaubern, und Jorinde stand da, ... Da machte er auch alle Vögel wieder zu Jungfrauen, と、鳥の入った籠をこっそり取って、戸の方へ行こうとす

る。ヨリンゲルが血のような赤い花で籠と老婆に触れると、魔法を使うことができなくなり、鳥がヨリンゲルの姿になる。ヨリンゲルは他の鳥もすべて乙女の姿に戻してやる。

第3番目は『6人の家来』である。このメルヘンも最初に女魔法使いが登場する。Vorzeiten lebte eine alte Königin, die war eine Zauberin, und ihre Tochter war das schönste Mädchen unter der Sonne. Die Alte dachte aber auf nichts, als wie sie die Menschen ins Verderben locken könnte, und wenn ein Freier kam, so sprach sie, wer ihre Tochter haben wollte, müßte zuvor einen Bund (eine Aufgabe) lösen, oder er müßte sterben. Viele waren von der Schönheit der Jungfrau verblendet und wagten es wohl, aber sie konnten nicht vollbringen, was die Alte ihnen auflegte, und dann war keine Gnade, sie mußten niederknien, und das Haupt ward ihnen abgeschlagen. このように、女魔法使いは年老いた女王である。この女魔法使いは、お日様の下で最も美しい娘をだしに、人の命を取ることばかり考えている。お姫様を嫁に欲しい者は、女魔法使いが課す課題を果たさなければならない。失敗すれば、容赦なく斬首される。すでに多くの者がお姫様の美しさに目が眩んで、難題に挑み、失敗して首を切り落とされていた。女魔法使いに慈悲の心はない。

ある時、6人の家来を連れた王子がお姫様欲しさに難題に挑んだときの様子である。Die Zauberin freute sich, daß ein so schöner Jüngling wieder in ihre Netze fiel, und sprach 'dreimal will ich dir einen Bund aufgeben, lösest du ihn jedesmal, so sollst du der Herr und Gemahl meiner Tochter werden.' このように、女魔法使いは非常に美しい若者が網にかかったことを喜び、難題を3つ解いたら、娘の婿にしてやると言う。1つは、紅海の底に沈んでいる指輪を取ってくること、2つ目は、牡牛300頭を骨や毛も一緒に丸ごと食べ、葡萄酒300樽を一滴も残さず飲み干すこと、3つ目は、お姫様を抱いたまま徹夜することである。3つ目は一番たやすく見えるが、実は11時からみんなが眠るように女王が魔法をかけているので、最も困難な課題である。

王子が3つの難題を解くと、女魔法使いは娘を王子にやると約束せざるを得なくなるが、「Schande für dich, daß du gemeinem Volk gehorchen sollst und dir einen Gemahl nicht nach deinem Gefallen wählen darfst.' 身分の卑しい者の言いなりになり、自分の好みで夫を選ぶ訳にはいかななくなる」とは、お前の恥というもんだ。」と娘を挑発する。誇りを傷つけられた娘は王子に、燃える巨大な薪の山に誰かが平気で座るまでは、あなたのお嫁にはならないと言う。この課題もやり遂げると、娘は王子と結婚せざるを得なくなる。ところが、女王は「こんな恥辱には耐えられない。」と言って、娘を取り返そうと、兵士を差し向ける。しかし腹男(でぶ)が飲んでいて海水を吐き出すと、大きな湖ができ、全員溺れ死ぬ。派兵が失敗すると、今度は騎兵を繰り出す。これも眼光爆弾男によっていとも簡単に粉砕される。こうして王子は娘を手に入れる。

第4番目は『水晶の玉』である。

このメルヘンもいきなり女魔法使いが登場する。Es war einmal eine Zauberin, die hatte drei Söhne, die sich brüderlich liebten: aber die Alte traute ihnen nicht und dachte, sie wollten ihr ihre Macht rauben. Da verwandelte sie den ältesten in einen Adler, der mußte auf einem Felsengebirge hausen, und man sah ihn manchmal am Himmel in großen Kreisen auf- und niederschweben. Den zweiten verwandelte sie in einen Walfisch, der lebte im tiefen Meer, und man sah nur, wie er zuweilen einen mächtigen Wasserstrahl in die Höhe warf. Beide hatte nur

zwei Stunden jeden Tag ihre menschliche Gestalt. Der dritte Sohn, da er fürchtete, sie möchte ihn auch in ein reißendes Tier verwandeln, in einen Bären oder einen Wolf, so ging er heimlich fort. このように、女魔法使いには3人の息子があるが、実の息子なのに信用せず、自分の力を奪われないように、長男を鷲に、次男を鯨に変える。2人は毎日2時間しか人間の姿に戻ることができない。三男は動物に変えられないよう、密かに逃げ出す。この女魔法使いの魔法は、水晶の玉によって破られ、兄達は元の人間の姿に戻る。

2 魔術を使う女

第1番目は『6羽の白鳥』である。魔女の娘は、この世に並ぶものがない程美しい。しかし、娘をまじまじと見た王様は、ぞっとするような恐ろしさを感じた。娘は母親から魔術を教わっており、肌着の中に魔法を縫い込み、それを王子達に投げかけ、王子達を白鳥に変えた。白鳥達の妹は、友禅菊で兄達の肌着を編み、6年間話すことも笑うこともしないという試練に耐え、兄達を白鳥から人間の姿に戻した。

第2番目は『白雪姫』である。白雪姫の継母のお后様はどんな人物であろうか。Es war eine schöne Frau, aber sie war stolz und übermütig, und konnte nicht leiden, daß sie an Schönheit von jemand sollte übertroffen werden. Sie hatte einen wunderbaren Spiegel, wenn sie vor den trat und sich darin beschaute, sprach sie

‘Spieglein, Spieglein an der Wand,
wer ist die Schönste im ganzen Land?’

so antwortete der Spiegel

‘Frau Königin, Ihr seid die Schönste im Land.’

Da war sie zufrieden, denn sie wußte, daß der Spiegel die Wahrheit sagte. このように、お后様は、真実を語る魔法の鏡に、自分が国中で一番美しいと言われると満足するが、自分よりも美しい者がいることがわかると我慢がならない「自惚れ屋で高慢で」ある。それは度を越している。白雪姫が自分よりも美しいことが分ると、嫉妬の余り、狩人に白雪姫殺害を命じ、肺と肝臓を切り取って持って帰れと言う。お后様は、狩人が持って帰った肺と肝臓（実は猪の子の肺と肝臓）を白雪姫のものと思って塩茹でにして食べてしまった。猟奇的な人食いである。白雪姫が生きていることを知ったお后様は、今度は自らの手で白雪姫を殺そうとする。行商人の格好をして白雪姫の所に出かけて行く。そして売り物の衣装の締め紐で、白雪姫を息が止まって倒れるまで絞める。小人たちの助けで、白雪姫が息を吹き返すと、今度はお后様は魔術を用いて毒の櫛を作り、それで白雪姫を殺す。小人たちの助けでまた白雪姫が生き返ると、お后様は猛毒のりんごをこしらえ、白雪姫を殺す。これで、お后様の嫉妬心も少し落ち着く。しかし白雪姫が生き返って、王子と結婚することを知ると、お后様は居ても立ってもおられず、結婚式に出かけていく。式でお后様は真っ赤に焼けた鉄の靴を履かされ、死ぬまで踊らされる。

第3番目は、『小羊と小魚』である。

魔術を使う場面を引用する。Wie sie (die Kinder) so fröhlich dahinsprangen, sahs die Stiefmutter vom Fenster mit an und ärgerte sich. Weil sie aber Hexenkünste verstand, so verwünschte sie beide, das Brüderchen in einen Fisch, und das Schwesterchen in ein Lamm. このように、子どもたちが楽しげに遊ぶのを見て腹を立てた継母は、魔術を使って、兄を小

魚に、妹を小羊にする。そしてこの小羊を継母はつぶして客人をもてなそうとする。しかし、料理人は別の動物を料理してお客に出す。小羊と小魚は、Da sprach die weise Frau einen Segen über das Lämmchen und Fischchen, wovon sie ihre menschliche Gestalt wiederbekamen. と、賢女に祝福の辞を述べてもらい、人間の姿に戻る。そして兄妹は森の中で楽しく幸せに暮らす。

以上、魔女、女魔法使い、魔術を使う女の様々な特徴をまとめて表にすると、次頁のようになる。

第2章 魔女の像と特徴

以上の考察および表をベースに、グリム童話で描かれている魔女の断片的な特徴から一つの魔女像を作り上げてみると、魔女は、褐色の顔、赤い目、長い鼻、がりがりに痩せた手と指をし、だみ声で、撞木杖をつき、頭をぐらぐらさせながら忍び足で歩く、年を取ったおばあさんということになる。しかしこれはグリム童話の魔女のモザイク像であり、実像とは言えない。

以下、魔女のさまざまな特徴を挙げ、その実像に迫ることにする。

1. 性別

まず最初に、グリム童話に登場する魔女 (Hexe) は、ほぼ全員女性であろう。それは、die böse Stiefmutter (『兄と妹』)、eine steinalte Frau (『ヘンゼルとグレーテル』)、meine Stiefmutter (『なぞなぞ』)、eine böse Frau (『トルーデおばさん』)、eine alte Frau (『6羽の白鳥』、『森の中の老婆』)、eine alte Köchin (『鳥っ子』)、eine Frau (『最愛の恋人ローラント』、『白い花嫁と黒い花嫁』)、ein altes Weib (『二人の兄弟』)、ein Mütterchen (『黄金の子どもたち』)、die Alte (『青い灯り』)、eine Alte (『キャベツ驢馬』、『森の中の老婆』、『太鼓叩き』) という言葉で明白である。判別するための何の手がかりもないメルヘンは『蛙の王様あるいは鉄のハインリッヒ』、『鉄のストーブ』、『森の家』の3篇だけである。ただし、これら3篇に登場するHexeも男性だと想像することは困難であろう。ちなみに、グリム童話では、男の魔法使いはZauberer (『ガラスの棺』ではSchwarzkünstlerとも呼ばれている) もしくはHexenmeisterと呼ばれており、男の魔女、いわば魔男を表すHexerという語は使われていない。それももともとであろう。Hexeというドイツ語は女性名詞であるが、普通男性をも含む一般名詞として用いられるからである。ただ、歴史上のHexenprozesseやHexenverfolgungenのHexeという概念には、便宜的であれ、男性も含まれていたことを考慮すると、魔女が女性であるということは、グリム童話の魔女の特徴の一つと言ってよい。

2. 年齢

グリム童話の魔女の像で、次に言えることは、魔女はお年寄りだ、少なくとも若くはない、ということである。それは、die Alte (『兄と妹』、『なぞなぞ』、『最愛の恋人ローラント』、『青い灯り』)、eine steinalte Frau (『ヘンゼルとグレーテル』)、eine alte Frau (『6羽の白鳥』、『森の中の老婆』)、eine alte Köchin (『鳥っ子』)、ein altes Weib (『二人の兄弟』)、ein Mütterchen (『黄金の子どもたち』)、eine Alte (『キャベツ驢馬』、『太鼓叩き』)、eine alte Hexe (『鉄のストーブ』)、die alte Hexe (『白い花嫁と黒い花嫁』) という言葉で分かる。17篇中14篇を占める。残りは3篇であるが、『トルーデおばさん』では、Hexeがeine böse Frauと言われているので、大人の女性である。魔女の年齢に関してまったく描写がなく、また手がかりとなる単

魔女	魔法	魔法の解除	魔法をかける者	居住と場所	容姿	立脚人物	何をするか	魔法	魔法の道具	生活ぶり	財産	誘える者、上下仲間	仲間	結点	来路	探偵	男女
137 鉄のストロー	王子を呪い、鉄のストローに閉じ込める。地を穴をかける。	王子を呪い、鉄のストローに閉じ込める。地を穴をかける。	王子	他人	お年寄り。 eine alte Hexe	?	CI魔法	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
135 白い花嫁と黒い花嫁	兄弟を平穏に、妹を王位に昇格させる。王子の目をくらます。王子は妹を王位に昇格させる。	兄弟を平穏に、妹を王位に昇格させる。王子の目をくらます。王子は妹を王位に昇格させる。	魔法の継子娘、王様	魔法の家?	お年寄り。 die alte Hexe	神話に由来、または王様の花嫁にする。	CI魔法	?	?	?	?	なし	?	?	?	?	なし
149 森の家	王子を老人にすくめる。王子は王子に戻る。	王子を老人にすくめる。王子は王子に戻る。	王子、召使、王宮、他人	?	?	?	CI魔法	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
139 太陽の卵	王子を老人にすくめる。王子は王子に戻る。	王子を老人にすくめる。王子は王子に戻る。	王子、召使、王宮、他人	?	?	?	CI魔法	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
142 ラプンツェル	王子を老人にすくめる。王子は王子に戻る。	王子を老人にすくめる。王子は王子に戻る。	王子、召使、王宮、他人	?	?	?	CI魔法	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
69 ヨリンデとヨリンガル	王子を老人にすくめる。王子は王子に戻る。	王子を老人にすくめる。王子は王子に戻る。	王子、召使、王宮、他人	?	?	?	CI魔法	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
134 6人の家来	王子を老人にすくめる。王子は王子に戻る。	王子を老人にすくめる。王子は王子に戻る。	王子、召使、王宮、他人	?	?	?	CI魔法	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
137 水晶の玉	王子を老人にすくめる。王子は王子に戻る。	王子を老人にすくめる。王子は王子に戻る。	王子、召使、王宮、他人	?	?	?	CI魔法	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
Hexenkunst を使う女	王子を老人にすくめる。王子は王子に戻る。	王子を老人にすくめる。王子は王子に戻る。	王子、召使、王宮、他人	?	?	?	CI魔法	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
53 白竜	王子を老人にすくめる。王子は王子に戻る。	王子を老人にすくめる。王子は王子に戻る。	王子、召使、王宮、他人	?	?	?	CI魔法	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
141 小舟と小魚	王子を老人にすくめる。王子は王子に戻る。	王子を老人にすくめる。王子は王子に戻る。	王子、召使、王宮、他人	?	?	?	CI魔法	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
49 6月の白鳥	王子を老人にすくめる。王子は王子に戻る。	王子を老人にすくめる。王子は王子に戻る。	王子、召使、王宮、他人	?	?	?	CI魔法	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?

語もないメルヘンは、『蛙の王様あるいは鉄のハインリッヒ』と『森の家』だけである。ちなみに、『蛙の王様あるいは鉄のハインリッヒ』において、魔女に関してなされた唯一の言及はグリムが後に挿入した「er wäre von einer bösen Hexe verwünscht worden, 私は悪い魔女に魔法をかけられていたのです。」という王子の身の上話だけである。『森の家』でも、魔女の叙述は、魔法を解かれた王子の身の上話に出てくるだけである。しかも、その身の上話は ich ... war von einer bösen Hexe verwünscht worden, と、台詞まで前者と同じである。

ところで、グリム童話の中の魔女が年寄りであるということは、歴史上の魔女の像とも一致する。「魔術は盗みと同質のものを含んでいて、この発想は病気と健康という領域にも適用される。ある人が病気になるのは、ひょっとしたらその人の生気が魔女に吸い取られているのかもしれない、そう考えるのは当時の人々にはごく自然なことだった。民衆の中の魔女がたいいてい年老いた女性であるのも、こういう魔女は常に若く健康な人の生気を吸い取る必要があると考えられたからだった。これはメルヘンの中に登場してくる魔女とも共通点がある。若さと健康が水や体液で象徴されるのに対し、魔女はそうした水分が失われた「枯れた」存在であり、水分を渴望してやまない。おそらくはこのような連想が魔女がおこなうとされるさまざまな悪行と関係しているだろう。魔女が男性を不能に、女性を不妊にするという観念は、すでに『魔女への鉄槌』の中に現れてはいる。性的能力は精液、愛液に象徴され、それを吸い取って枯らしてしまうのが魔女である。」（『魔女裁判 魔術と民衆のドイツ史』牟田和男著、吉川弘文館、歴史文化ライブラリー 102、S.117～119）「マクファーレンによると 1645 年に告訴されたエセックスの 15 名の魔女の年齢は、40 代 2 名、50 代 3 名、60 代 7 名、80 代 3 名…とされている。…平均年齢 60 歳前後というのが魔女のイメージだとみて間違いはないであろう。」（『魔女狩り』浜林正夫、井上正美著、歴史新書、ニュートンプレス S.201～202）ただし、歴史上の魔女には若い人々もいたが、グリム童話では、若い魔女を想像することは困難である。

ちなみに、グリム童話に登場する女魔法使いも 4 人すべてお年寄りで、魔術を使う女も 3 人とも大人の女（継母と若いお后）で、少女はいない。『日本の昔ばなし』でも、山姥が登場人物として登場する限り、4 人全員お年寄りである（『牛方と山姥』、『米ぶき栗ぶき』、『天道さん金の鎖』、『観音さま二つ』）。こう見てくると、お年寄りだということが魔女に固有のことだとは言えない。しかし、グリム童話の魔女は、名前だけしか出てこない場合は別として、登場人物に限ると、全員お年寄りである。

3. 継母

統計を取ってみると、私の不確かな記憶とは違って、魔女が継母である話は少ない。17 篇中 4 篇しかない。これ以外に身分の分っている魔女は『鳥っ子』の山番の女料理人だけである。他は全て赤の他人か、叙述がないのでわからない場合もあるが、他人と思われる。4 人の女魔法使いには、継母は 1 人もいない。魔術を使う女は 3 人とも継母である。山姥は、実の娘がいる『牛方と山姥』以外は、1 人者のようであり、継母は 1 人もいない。

4. 実の娘（子）

魔女に実の娘がいる話は 5 篇で、その娘が美しい場合は 2 例、醜い場合は 3 例である。魔女の実の娘が登場するメルヘンで、魔女の実の娘がそれほど悪人でない場合は『キャベツ驢馬』の 1 篇だけである。他の 4 篇では、魔女の実の娘は魔女と一緒に人々を殺したり（『兄と妹』、『白い花嫁と黒い花嫁』）、魔法で王子を白鳥に変えたり（『6 羽の白鳥』）、前掛け欲しさに人を殺すことを黙認したり（『最愛の恋人ローラント』）する。継子娘がいる場合は 3 例で、

この場合継子娘はすべて美しい。次に、da sie von ihrer Mutter die Hexenkünste gelernt hatte, so nähete sie einen Zauber hinein. と、母親の魔女から魔術を習って、自らも魔術を使う、つまり魔術を継承する実の娘は『6羽の白鳥』だけである。これは、「魔女性はしばしば遺伝するといわれたから、下手をすると子どもまで魔女にされてしまう」(『魔女の社会史』浜林正夫著、未来社 S.50) 歴史上の魔女とは違う。

女魔法使いは、4人中、2人に実の子どもがいる。『6人の家来』の女魔法使いには、最も美しい娘がいる。『水晶の玉』の女魔法使いには、3人の息子がいる。魔術を使う女には、3人も継子がいる。1人は結婚後継子ができる。『白雪姫』のお后様には、世界一美しい継子娘がいる。『小羊と小魚』の魔術を使う女には、継子の男の子と女の子がいる。山姥で娘がいるのは、『牛方と山姥』だけで、若いというだけで、娘が美しいかどうかわからない。

5. 住处

魔女の家(17篇中8篇に家の叙述がある)と住んでいる場所(17篇中9篇で場所の叙述がある)に関してであるが、叙述がある限り、魔女の家は小さな家(8篇中5篇)であり、家は森の中(9篇中7篇)にある。小さな家でない場合は、単に家(ein Haus)という叙述のみが1篇、立派なお城(ein ansehnliches Schloß)、古い石の家(ein altes steinernes Haus)がそれぞれ1篇である。魔女が森の中に住んでいないのは、森の向こうの平原に住む『キャベツ驢馬』の魔女とガラスの山の上に住む『太鼓叩き』の魔女のみである。森の中とは異界を意味しており、魔女は異界に住む異界の存在だということになる。森の向こうもガラスの山の上も、異界という点では、森の中とさほど大差はない。そうすると、魔女は、叙述がある限り、すべて異界に住んでいるということになる。このことは、魔女「Hexe」の語源である「垣根」からしても当然であろう。「このような異教の女神はキリスト教にとって目をむくような存在だったろう。アダムを誘惑したイヴの罪は償いきれない大罪だとするキリスト教にとって、異教の女神は罪深い存在だ。ギリシャの女神ヘカテも、地下に住み、夜には松明を手に地獄の犬を連れた恐ろしい姿で徘徊する霊界の女王、魔の女神にされた。村であれ、この世であれ、境を越える女が魔女の語源だった。女神たちは追われて、山や森に身を隠して魔性の生きものになっていった。」(『グリム童話の魔女たち ドイツ魔女街道を歩く』西村佑子著、洋泉社 S.176~177)

女魔法使いは『水晶の玉』の女魔法使いを除き、農家やお城に住んでいる。『水晶の玉』の女魔法使いも、三男が黄金の太陽のお城(auf dem Schloß der goldenen Sonne)、つまり異界へと旅立つことからして、また全体から判断して、住んでいる所が異界のように思えない。魔術を使う女は、お城に住んでいたり、農家と思われる場所に住んでいる。ただ『6羽の白鳥』の魔術を使う女だけは森に住んでいる。この女は魔女の娘だから森に住んでいるのも当然である。『日本の昔ばなし』の山姥は、村か村の近く(『牛方と山姥』)か、山中(『米ぶき粟ぶき』、『天道さん金の鎖』)か、奥(『観音さま二つ』)に住んでおり、後は不明(『三人のくせ』は山姥でなく「山ん婆」)である。日本の場合、山は死後魂が上っていき山の神となる場所ではあるが、山も山の中もあまり異界のイメージはない。

では、次に歴史上の魔女はどうなのであろうか。歴史上は、「魔女と危害をうけたものとは、かならず顔見知りであり、同じ村ないし近くの村に住んでいるのであって、魔女が遠くまでかけて行って縁もゆかりもない人に危害を加えたというケースはまったくない。あるいは、特定の人だけが災難をうけるのではなく、国中に伝染病が流行するとか、全国的に凶作であるとかというときにも、魔女のせいにはされることはない。魔女の加える危害は、せいぜい、かの女

の住んでいる村とその周辺にとどまるのである。」（『魔女の社会史』同上 S.40）

そうすると、森の中に住む魔女、異界の存在である魔女、これは、女魔法使いや魔術を使う女とも、また歴史上の魔女とも違う、グリム童話に登場する魔女の特徴と言えよう。

6. 宝物

魔女が宝物を持っている場合は『ヘンゼルとグレーテル』（真珠や宝石）、『森の中の老婆』（宝石のついた指輪）、『青い灯り』、『キャベツ驢馬』、『太鼓叩き』（金や銀などの宝物）の5例しかない。他人の財産を奪ったことが明らかなのは『キャベツ驢馬』だけである。女魔法使いも、魔術を使う女も、山姥も同じで、宝物は持っていない。例外は『米ぶき粟ぶき』だけである。

7. 魔法

魔女は、魔法、魔術を使う。つまり魔女は、人や動物、物に魔法をかけたり、呪ったりして、それらを他のものに変えたり、ある場所に閉じ込めたりするか、あるいはそういう能力を持っている。これは魔女と言われるにふさわしい。ドイツ語で魔女はHexeであるが、その動詞形がhexen、つまり「魔法を使う」だからである。また、歴史的にもそれはよくわかる。歴史として、魔女概念の厳密な神学的規定はさておき、魔女迫害法は最初魔術禁止法であったからである。「1542年の法律（「最初の魔女迫害法」）や1563年の法律も、結果的に見て魔女迫害法になったものであるけれども、本来の趣旨は魔術禁止法なのであった。」（『魔女の社会史』浜林正夫著、未来社 S.72）魔法や魔術を使う魔女が登場するのは、17篇の内、14篇もある。『蛙の王様あるいは鉄のハインリッヒ』では、魔女は王子に魔法をかけ、王子を蛙（Frosch）に変えた。『兄と妹』の魔女は泉に魔法をかけ、その水を飲む者を虎、狼、野呂鹿の子鹿（Rehkälbchen）に変える魔法を使っている。その魔法で、兄は実際子鹿にされてしまった。『トルーデおばさん』では、魔女は女の子を丸太に変えた。『2人の兄弟』では、魔女は枝鞭で王様を石にした。『黄金の子どもたち』でも、魔女は黄金の子供を石にした。『キャベツ驢馬』では、魔女は魔術（Hexenkunst）を使い、はるか彼方にいる人間を眠らせた。『森の中の老婆』の魔女は王子を立ち木と白い鳩に変えた。『鉄のストーブ』の魔女は、王子を呪い、森の中の大きな鉄のストーブに閉じ込めた。またお城を小さな家に変えたり、王様の子供たちをひき蛙（Itschen）に変えたのも同じ魔女の仕業と思われる。『白い花嫁と黒い花嫁』の魔女は、魔術（Hexenkünste）を用いて、継娘の兄を半盲に、継娘の白い花嫁を半聾にした。また、魔女は王様が黒い花嫁の「底抜けの醜さ」に腹を立て、黒い花嫁を嫌悪していたのに、魔術で王様の目を眩まし、黒い花嫁を城に置いて置くように仕向けたばかりか、遂にはその黒い花嫁と結婚させてしまった。『森の家』の魔女は、王子を氷のような白髪の老人にし、召使たちを小さな雌鶏と小さな雄鶏とまだら模様の牝牛に変えた。『太鼓叩き』の魔女は、お姫様をガラスの山に封じ込めた。また、太鼓叩きが燃えている薪の山の中に飛び込んで行き、燃えない丸太を一本取ってきて、地面の上に置くと、その丸太が美しい娘に変る場面があるが、娘を丸太に変えていたのは、話の前後から、恐らく魔女の仕業であろう。魔女が実際に魔法を使わない『最愛の恋人ローラント』でも、魔女の持っている「魔法の杖」があれば、誰でも人を何にでも変身させることができるので、魔女は魔法を使うし、使う能力を持っていると言える。実際、魔法の杖を魔女から奪った魔女の継娘は、その魔法の杖を用いて、恋人ローラントを湖とバイオリン弾きに変身させ、自分は鴨と美しい花に変身した。また、魔女が魔術を用いることのない『6羽の白鳥』でも、魔女の娘が母親の魔女から魔術を学び、肌着に魔法を縫込み、6人の王子

達を白鳥に変えたのであるから、師匠である母親の魔女にとっては、魔術を使うことくらい朝飯前であろう。

以上のような魔術を用いない『なぞなぞ』でも、魔女は毒を作り、王子と召使を毒殺しようとする。それは悪い術 (böse Künste) と言われているが、同じように毒の櫛を作って継子娘を殺す「白雪姫」で、それが魔術 (Hexenkünste) と呼ばれているので、それも魔術と言って差し支えないであろう。毒を作るこの魔術は『キャベツ驢馬』の魔女の催眠術と同じで、昔民間で尊敬されていた医者、占い師、巫女が用いる医術と同種のもの一実はこちらが邪悪な魔術だとしてキリスト教から敵視され、それを用いる者が魔女として弾圧される一つの理由となった一で、非常に古典的な魔女の能力だと言えよう。

魔女が魔法を使わない残りの3篇のメルヘンは『ヘンゼルとグレーテル』、『鳥っ子』、『青い灯り』である。しかし『ヘンゼルとグレーテル』では、魔女はお菓子の屋根、白砂糖の窓の小さなパンの家を作り、子供たちをおびき寄せさせる。これは魔法や特別な術をわきまえていなければできないことであろう。こういう意味で、これも限りなく魔法、魔術に近い。そうすると、魔女が魔法や魔術をまったく用いないメルヘンは、『鳥っ子』と『青い灯り』の2篇だけである。しかし、『青い灯り』に登場する魔女は青い灯りを持っている。それで煙草に火をつけると、小人が現れ、超能力を発揮し、青い灯りの持ち主が誰であれ、持ち主の望みを何でもかなえてくれる。これも一種の魔法である。そうすると、魔法や魔術を使わない魔女はたった1人だけということになる。

a. ところが、この魔法、魔術を魔女が何のために使うのかは殆どわからない。毒を作る術を含め、魔法、魔術を広い意味にとった12篇の内3分の2の8篇で、なぜ魔法をかけたのかはわからない。わかっている理由をあげると、『兄と妹』ではいじめと殺意、『黄金の子どもたち』では自分の飼い犬を殺すと言われたから、『キャベツ驢馬』では魔法の外套を奪うため、『白い花嫁と黒い花嫁』では自分の娘を后にするためである。

b. また、魔女が魔法をかけたり、呪ったりする相手も様々で、一定しない。王様が2人、王子が4人、お姫様が1人、狩人が1人、魔女の継子娘が1人、その兄が1人、魔女の継子息子が1人、わがままな普通の女の子が1人、多くの人々が1例、召使が2人、(黄金の魚を食べて生れた)黄金の子供が1人、動物(兎、狐、狼、熊、ライオン、馬)が2例、王宮が1例である。性別が分かっている限りでは、男が17名、女が5名である。

c. そもそも、魔法を使う魔女そのものがどんな身分、職業、地位、暮らしぶりなのか殆どわからない。唯一わかるメルヘンは『鳥っ子』だけである。ここに登場する魔女は山番の家の女料理人である。ところが、彼女は魔女と言われているにもかかわらず、魔法を用いない唯一の例外である。他に『兄と妹』や『最愛の恋人ローラント』の魔女は継子との暮らしぶりから庶民のようであり、『なぞなぞ』の魔女は強盗の仲間かもしれない、『白い花嫁と黒い花嫁』の魔女は餌用の草を刈りに出かけているので農婦であろうか、ということがかろうじて推測できるだけである。ところが、歴史上魔女とははっきり区別されなかった女魔法使いは、菜園を営む農婦(『ラプンツェル』)であったり、お城に住む老婆(『ヨリンデとヨリンゲル』)であったり、年老いた女王(『6人の家来』)であったり、3人の息子を持つ母親(『水晶の玉』)であったり、また魔術を使う女は、お城に住むお后様(『白雪姫』)であったり、継子が2人いる農家のおかみさん(『小羊と小魚』)のようであったり、森に住む魔女の娘(『6羽の白鳥』)であったりと、身分や地位、職業など暮らしぶりが比較的よくわかる。ちなみに、歴史学では「魔女が社会的

には下層であり、魔術をかけられたほうがその少し上の階層というのが、ほぼ一致した結論である。」（『魔女狩り』同上 S.204～205）とされている。

以上の a, b, c のグリム童話の魔女の特徴は、歴史上の魔女からも裏打ちできる。史実としては、人が殺されたり、危害を加えられたり、原因不明の病気になったり、家畜が被害を被ったり、ビール、牛乳、バターなどの出来が悪かったりすると、魔女の魔術のせいだとされ、魔女探しが行われたりした場合が多々あったからである。つまり、誰が人畜、財産の被害を被るか、誰がその加害者、つまり魔女であるとされるかは、もともとわからないのである。もちろん魔女は異端者とちがって実在しないし、実在するのは普通の人々であり、彼らが突然魔女にされるのであるから、魔術と被害との因果関係はない、したがって、魔女が何の目的で魔術を使うかも多くの場合不明なのは当然である。「こういう裁判で立証をもとめられているのは、魔女とかの女がおこなった具体的な危害との関連ではなく、かの女が魔女であることだけである。…魔女裁判では…魔女であると疑われたものは魔女であることさえ証明されれば、いわば自動的に具体的な危害と結びつけられることとなる。ここに魔女裁判の特異性がある。…法律のうえでは、…魔術を用いること自体は処罰の対象ではなく、具体的な危害が処罰の対象ということになっていても、じっさいの裁判においては、魔術を用いること自体が有罪かどうかのわかれ目になってしまうのである。」（『魔女の社会史』同上 S.50～51）ただし、魔女とされやすい人もいたとの説もある。前述した『魔女狩り』によると、「村のなかで嫌われもの」（S.207）つまり「しょっちゅうがみがみと文句をいうとか、人をののしる」（同上）人、「ふしだら」（同上）な人、「古いや病気の治療などという、いわゆる『白魔術』を用いるもの」（同上 S.208）などが「魔女とみられがちであったろう」（同上）ということである。

d. 魔女がかけた魔法を解く方法も実に様々で、想像を超えた、驚きの方法もある。例えば、蛙を壁に投げつけたり、魔女を焼き殺したり（3例）、魔女の杖（Zauberstab）や枝鞭（Rute）を用いたり（2例）、魔女が手で触ったり、魔女の持っている質素な指輪を奪ったり、人間と動物に優しい娘に出くわしたことにより、魔法が解けたりする。『鉄のストーブ』では、お姫様が短刀でストーブを削り、王子を救い出し、魔法から解放する。催眠術をかけられた『キャベツ驢馬』では、自然に目が覚める。そして兄が半盲に、妹が半聾啞に、王様が目を眩まされた『白い花嫁と黒い花嫁』では、王様は、筋の運びから判断すると、自然に魔法が解けたのであろう。兄と妹は魔法が解けたのかどうか不明である。魔法をかけられたのに、その魔法が解けない話は『トルーデお婆さん』だけである。これは女の子が魔法をかけられ、丸太にされたまま焼き殺されたのだから、魔法が解けないのは当然である。ちなみに、魔女ではないが、『6羽の白鳥』では、兄たちを白鳥に変えた魔女の娘の魔術は、妹が6年間一言もしゃべらず、笑いもしないで、友禅菊で肌着を編むことで解ける。

e. 魔女は、魔女が本来持っている魔法や魔術を使えば、全能で、どんな相手であれ、どんな場合であれ、自分の思うがままになるはずであるが、自分が勝利するために、あるいは自分を救うために、魔女が魔法や魔術を使うことはない。そのためであろうか、魔女は意外な脆さを見せて、没落する。判決を受け、いとも簡単に焼き殺されたり（『兄と妹』）、パン焼き窯の中で焼かれたり（『ヘンゼルとグレーテル』）、鴨に池に引きずり込まれて溺死したり（『鳥っ子』）、死ぬまで踊らされたり（『最愛の恋人ローラント』）、縛られて焼き殺されたり（『2人の兄弟』）、絞首刑になったり（『青い灯り』）、驢馬にされて殴り殺されたり（『キャベツ驢馬』）、釘の出た樽に裸で放り込まれ馬に引き回されて殺されたり（『白い花嫁と黒い花嫁』）、燃え盛る火の

中に放り込まれて焼き殺されたり（『太鼓叩き』）する。

最後に、魔法、魔術を使うという点では、当然のことながら、魔女は、魔術を使う女や女魔法使い（ただし『ラプンツェル』の女魔法使いは魔法を使わない）と区別はできない。『日本の昔ばなし』の山姥は、観音さまに化ける場合はあっても、魔法や魔術を使うことはない。

8. 魔法の道具

それから、これも意外なことであるが、魔女が魔法をかけるのに、魔法の道具を用いる場合は少ない。魔法の杖（Zauberstab）と1マイル長靴（Meilenstiefeln）を持っている魔女が1例、石に変えることのできる枝鞭（Rute）を持っている魔女が1例、超人的な力を発揮する小人を呼び出すことのできる青い灯りを持っている魔女が1例、魔法を解くことのできる質素な指輪を持っている魔女が1例と、全部で4例しかない。しかも、魔女はその道具を使わない。魔女が道具を用いて魔法をかけるのは、『2人の兄弟』の1篇だけである。このメルヘンでは、魔女は枝鞭（Rute）を用いて王様や多くの人々と動物を石に変える。

4人いる女魔法使いも誰一人として道具を用いない。魔術を使う女は、その名のとおおり、魔術を使う能力を持っているので、なんら道具は用いない。『日本の昔ばなし』の山姥は、魔術や魔法を用いないので、そのための道具は持っていない。しかし、『米ぶき粟ぶき』の山姥は、あっという間に山や川を出現させることのできる「豆炒り」や着物、足袋、嫁入り衣装が出てくる「宝箱」のような不思議なものは持っている。

9. 悪行

魔女は数々の悪事を働く。これには例外がない。人に魔法をかけたり呪ったりして、人を動物や物に変えたり、ひどい境遇に追い込めたりすること（17篇中14篇）以外に、王家に嫁ぐことが決まっている継子娘を殺してまで、実の娘を後にしようとしたり（2篇）、継子娘を斧で殺そうとしたり、子供を殺して食べようとしたり、子供を釜茹でにして殺そうとしたり、毒殺しようとしたり、丸太にして焼き殺したり、井戸の底に落として殺そうとしたり、人の宝物を奪ったり、継子虐めをしたりする。ただし、『6羽の白鳥』の魔女は、森からの出口を教える代わりに、自分の娘を嫁にしると言い、強引に自分の娘を王様の後に据えるだけである。魔女が自分の娘を人の弱みに付け込んで強引に王様の後にするという行為は、他の悪事と比べると、それほどあくどいことではないように見えるが、悪事であることに変わりはない。

次に、現代の法制度で最も重大な犯罪である殺人（以前は大逆罪が最も重い犯罪であったこともある）について見ると、8篇で、魔女は人を殺したり、殺そうとして未遂に終わっている。『兄と妹』では、妹は森で野獣に喰いちぎられ、小鹿の兄は狩人に射殺されると魔女は思っていたのであるから、継子虐めをして、家を追い出した魔女には、殺人の意図がある。意図だけではない。王様と結婚した妹が男の赤ちゃんを産むと、魔女は実の娘と二人で、お后様をお風呂で熱蒸気で窒息死させる。『ヘンゼルとグレーテル』では、魔女はヘンゼルを煮て食い、グレーテルを焼いて食べようとする。『なぞなぞ』では、魔女は毒入りの飲み物を作って、王子を殺そうとする。『トルーデおばさん』では、魔女は女の子を丸太に変えて燃やす。焼殺である。『鳥っ子』では、魔女は鍋に湯を沸かし、鳥っ子を煮て殺そうとする。『最愛の恋人ローラント』では、魔女は継娘を寝ている間に鉞で斬首しようとする。『青い灯り』では、兵隊さんを井戸の底に落として殺そうとする。『白い花嫁と黒い花嫁』では、魔女は実の娘と二人で継娘を川の中に突き落として殺す。

悪事を働くという点では、魔術を使う女は、白雪姫を殺して食べようとしたり、継子を小羊

にして、食べようとしたりするし、魔法をかけて白鳥にしたり、魔女と何ら変らない。しかし、女魔法使いの中には、たった1人だけであるが、ちしゃを欲しがる者に、その可哀そうな状況を理解して、欲しいだけちしゃをやる心優しい魔法使いもいる。その女魔法使いは、その代わりに子どもをもらうが、もらった子はちゃんと育てている。

『日本の昔ばなし』の山姥は、全員人を食う。唯一の例外である『米ぶき粟ぶき』の山姥は、悪事はまったく働かない。それどころか、人食いの太郎と次郎から米ぶき、粟ぶきをかばい、逃がしてやり、その上、継子虐めを受けている善良な米ぶきに「宝箱」を与え、米ぶきが玉の輿に乗るのを助けてやっている。この山姥は、まるでグリム童話の賢女のようなのである。しかし、この昔ばなしでは、山姥は、確かに「山姥」と呼ばれているが、実は、山に住んでいる婆という意味でしかないので、日本昔話の本来の山姥とは言えないであろう。

10. 末路

次は、魔女が悪事を働くためであろうか、魔女の末路が悲惨な話が多い。17篇中10篇がそうである。具体的に見ていくと、魔女が焼き殺されるのが4例、溺死させられるのが1例、茨の棘に刺され、血を流しながら死ぬまで踊らされるのが1例、絞首刑にされるのが1例、殴り殺されるのが1例、丸裸にされ、釘の出た樽に入れられ、馬で引き回されるのが1例、毒で死ぬのが1例である。

魔女が最後まで登場し、主人公の一方の役を演じながら、その魔女が何の危害も加えられないメルヘンは2篇だけである。『黄金の子どもたち』と『トルーデお婆さん』である。前者に登場する魔女は、弟の黄金の子を石にする。魔女は、弟を救いに来た兄の黄金の子に「弟をもう一度生き返らせなければ、お前を撃ち殺すぞ」と脅され、弟を人間の姿に戻す。しかし魔女は何の危害も加えられない。珍しい話である。後者でも、魔女は娘を丸太にし、焼き殺しながら、「ほんとに明るく輝くもんだね！」と言って、体を温める。この残忍さに対して、魔女は復讐されることも、危害を加えられることもない。しかしこの場合、魔女の残忍さというより、親の言うことを聞かない娘は魔女にひどい目に会わされる、という教訓に話の重点があるからである。『6羽の白鳥』では、魔女はほとんど何の行いもしていない。自分の娘を嫁にするなら森からの出口を教えてやると言って、娘を王様に押し付けただけである。『蛙の王様』、『森の中の老婆』、『鉄のストーブ』、『森の家』では、魔女は被害にあった人の告白、回顧のなかで出てくるに過ぎず、主人公ではない。魔女の魔法は話の筋の一部を形作っているに過ぎない。

しかし、歴史上魔女扱いされたことの多い女魔法使いは、4篇すべてで何の危害も加えられない。魔術を使う女も悲惨な目に会わない。例外は『白雪姫』だけである。『日本の昔ばなし』の山姥は悲惨な最期を遂げる。『日本の昔ばなし』で悲惨な最期を遂げない山姥がでてくるのは『三人のくせ』と『米ぶき粟ぶき』である。前者では、実際には山姥は登場せず、昔話を子どもたちに話して聞かせてやり、子どもたちを早く寝かせるための昔ばなしの最後の文句、早く寝なければ「山ん婆が来て『塩つけち頭からひっかむぞ!』ていうばい。」という脅し文句が出てくるだけである。後者では、山姥と呼ばれているものの、実際は山に住んでいる婆に過ぎず、しかも悪事ではなく、良いことをするので、悲惨な最期がないのも当然である。

歴史上の魔女裁判と比較してみる。イギリスの魔女迫害法では、「悪霊のはたらき、または魔術により、人を殺したものは、重罪として、死刑。1542年法ではその財産も没収」、「同じく、他人の身体に危害を加え、または他人の財産を損傷したものは、…1542年法は…死刑と財産没収」、「同じく魔術によって、かくされた財宝や盗難品のありかを占うもの。…重罪として

死刑]、「同じく魔術によって、他人を『道ならぬ恋 (unlawful love)』におとしいれたり、その他のよこしまな行為をおかさせたもの。死刑と財産没収」(『魔女の社会史』浜林正夫著、未来社 S.20~22) となっており、最期は悲惨である。

11. 不問と脆さ

怖いイメージの魔女であるが、グリム童話の魔女はどこか抜けていて、もろい面がある。魔女が単に名前だけでなく、1 登場人物として出てくる童話 12 篇のなかで、5 篇でそうである。『ヘンゼルとグレーテル』では、魔女はヘンゼルを太らせてから煮て食おうとして、ヘンゼルに御馳走を与える。そしてヘンゼルが太ったかどうか確かめるため、毎日ヘンゼルに指を出せと言う。しかし、ヘンゼルは毎回小骨を差し出す。魔女はそれをヘンゼルの指だと思い込み、簡単に騙される。また、魔女はグレーテルを焼いて食おうとして、グレーテルをパン焼き釜の中に入れようとたくらむ。しかしグレーテルに、どうやって入ったらいいかわからないと言われると、自ら入ってみせ、グレーテルに後から突かれ、蓋を閉められて、焼き殺されてしまう。『なぞなぞ』では、魔女は自分の作った毒で、死んでしまう。『鳥っ子』では、魔女は池の水を飲み干そうと思って、腹這いになった時、鴨に池の中に引きずり込まれて死ぬ。『最愛の恋人 ローラント』では、魔女は大事な魔法の杖を奪われ、その自分の魔法の杖でバイオリン弾きに化けたローラントに踊らされ、茨に刺さって血だらけになって死ぬ。『白い花嫁と黒い花嫁』では、魔女はこれこれの悪事を働いた者はどういう仕打ちを受けるべきかと王様に聞かれ、自分のことだと気づかず、極刑を受けるべきだと言い、自ら自分に死刑を下し、処刑される。

このように、魔女は一方で魔術や魔法で超能力を発揮し、全能かと思えば、他方で滑稽なほど脆い側面を見せるが、このような抜けたところは、女魔法使いにも、魔術を使う女にもない。ところが、『日本の昔ばなし』の山姥にはそういう面がある。『牛方と山姥』の山姥は、食おうと思って捕まえた牛方の腰に細縄を結わえておいたが、牛方はそれを木の枝に結わえて逃げる。山姥が「まだか」と言うと、川の水が「まだも、こぼこぼ」と音を立てるので、じっと待っていて、牛方を逃がしてしまう。また逃げて木に登った牛方に、追いかけてきた山姥は牛方に木の登り方を聞く。牛方が「枯れた木の枝は、どしんどしんと強く力を入れてふんで、枯れない方の木の枝は、軽くさっと足をかけてのぼんだ」と答えると、山姥は言われたとおりにして、枝が折れ、川の中に落ちてしまう。山姥が怖がる鼠の音をさせると、山姥は櫃の中に入り、蓋をしてもらう。ここぞとばかり、牛方と山姥の娘は、櫃の中に湯を注ぎ、山姥を殺してしまう。どじの繰り返しである。『天道さん金の鎖』の山姥は、天から下って来た「腐れ縄」につかまって天に登ろうとして、落ちて死んでしまう。『観音さま二つ』の山姥は、捕まって火あぶりにされかかると、逃げて観音さまに化ける。しかし、「もとからの観音さんは、小豆飯を供えるといつもにっこり笑って右の手をささっしやる」と言われると、山姥は手を差し出し、捕まって、「踏んだりけったりどやしたり」されて、殺される。哀れなほどどじである。

12. 人食い

意外であるが、魔女は一般に人を食べない。唯一の例外は、ヘンゼルを煮て食い、グレーテルを焼いて食べようとする『ヘンゼルとグレーテル』である。しかし、『ヘンゼルとグレーテル』でも、魔女は実際に彼らを食べてはいない。もっとも、so machte sie es (ein Kind) tot, kochte es und aß es, とあるので、魔女は子どもを食べたことはあるが、この場合も過去のこととして述べているだけである。『鳥っ子』も魔女は鳥っ子を鍋で茹でて殺そうとするが、食べるためとは限らない。史実として、幼児を煮て軟膏を作ったとされて処刑された魔女もいた

から、釜茹でしたからといっても食べるためとは言えないのである。女魔法使いも、グリム童話では4話に登場するが、いずれも人を食べない。

ところが、歴史的には魔女とされ、処刑されたこともある魔術を使う女は、グリム童話の場合、3篇のうち『白雪姫』と『小羊と小魚』の2篇で、人を食べようとする。前者では、魔術を使うお后様は白雪姫を、後者では、継母は魔術で継子娘を小羊にし食べようとする。前者では、お后様は、猪の子の肺と肝臓を白雪姫のものだと思って食べている。しかし、いずれの場合も、実際に人を食ってはいない。

『日本の昔ばなし』の山姥や鬼婆は、人を食おうとする（『牛方と山姥』の山姥と『三人のくせ』の山ん婆そして『三枚のお札』の鬼婆）ばかりか、『飯くわぬ女』の鬼女、『天道さん金の鎖』と『観音さま二つ』の山姥は、実際に人を食っている。人を食わないのは『米ぶき粟ぶき』の山姥だけである。しかし、この話では、婆さまは山姥と呼ばれているが、この話とそっくりの『鬼と三人の子ども』では、婆さま（婆さん）は、山姥と呼ばれておらず、『米ぶき粟ぶき』に登場する山姥も、その意味するところは、単に山の中に棲んでいるお婆さんという感じが強い。そうすると、この山姥が人を食わないのも理解できる。この話を除くと、山姥、鬼婆、鬼女はすべて人を食うか、食おうと言えらる。

このような比較からすると、魔女はあくどいことをするが、人を食べないのが特徴だと言えよう。また、人食いと思われる魔術を使う女や『ヘンゼルとグレーテル』の魔女の場合も、グリム童話では、実際には人を食べてはいないし、もちろん食べている場面、描写はない。ところが、『日本の昔ばなし』の山姥の場合、食べている場面、描写もある。『天道さん金の鎖』では「生れだちの子供」を食べる「こりこりという音がした」とあるし、『飯くわぬ女』では「友だちを頭からがしがし食いだした。」と描写も生々しい。これに対し、グリム童話では、魔女は実際に人を食うことはないし、食う場面も出てこない。これは、キリスト教によるカニバリズムス禁止のせいであろう。それに、歴史的にも、人を食ったかどで、魔女裁判にかけられたケースが極めて稀だったという事情もあろう。「幼児の死体を煮て食べたという告白はほとんどないが、ただひとつ、ランカシャにその事例がある。…これは正確には魔女の告白というよりも第三者の証言なのである」（『魔女の社会史』同上 S.60）

13. 踊り

グリム童話の魔女は、ドイツの歴史の魔女裁判にあった魔女への特別尋問項目の「舞踏」（『魔女裁判』同上 S.11）などしないし、猥雑な舞踏会にも参加しない。「集会」（同上 S.12）にも参加しない。「淫行」（同上 S.13）とも無関係である。さらに「べとべとと汚れた熊手や箒に乗って、あるいは悪霊の情夫の助けを借り、山羊や他の動物に跨って、本当に空を飛んで夜の舞踏に行き来した」（同上 S.12）ということもない。『青い灯り』の魔女が山猫の背中に乗ることはあっても、空を飛びはしない。もっとも、この場合も、魔女は山猫の背中に自ら乗っているのではなく、乗せられているのである。また「穀物、葡萄酒、その他の果実を駄目にするため、悪天候、芋虫、蝸牛、その他の害虫を発生させようと決議」（同上、S.13）したり、「家畜に危害を加えた」（同上、S.14）り、「死んだ子供を…墓地から掘り出し、…おぞましい脂を作るのに用い」（同上 S.16）たりするようなこともグリム童話の魔女は行わない。

14. 変身

また魔女への特別尋問項目には「被告は時々、猫、狼男その他の動物に姿を変えなかったか。」（同上、S.15）とあるが、グリム童話の魔女で自ら変身する者は1人としていない。しかし、

『日本の昔ばなし』の山姥の中には変身する者（『観音さま二つ』）もいるし、鬼婆（『三枚のお札』）や山男（『鬼を一口』）にも変身する者がいる。また、女魔法使い（『ヨリンデとヨリンゲル』）や魔法使い（『ガラスの棺』、『泥棒とその師匠』）の中にも、変身する者がいる。だから、変身しないというということは、歴史上の魔女、魔法使い、女魔法使い、山姥と比べた場合のグリム童話の魔女の特徴だと言えよう。もっとも、魔術を使う女も変身しないが。

15. 悪魔

グリム童話の魔女を分析するだけでは出てこない、グリム童話の魔女の最大の特徴の一つは、魔女が悪魔と結託することがまったくないということである。これは、魔女とは「悪魔と契約を結び、その魔力を悪魔から得て他人を害する者である。」（同上、S.21）、「キリスト教的悪魔学の影響を色濃く受け、悪魔と結託して神に背くという精神的な罪と、この地上に害悪をもたらすという世俗の罪とを犯した犯罪者なのである。そして何よりも魔女が当局の厳しい処断の対象となったのは、前者の精神的な罪、悪魔との契約を結ぶ人間という概念が確立したからである。」（同上、S.20～S.21）という神学上の魔女の厳密な規定との大きな相違である。魔女だけでなく、グリム童話の女魔法使いや魔術を使う女も悪魔とまったく関係がない。こちらの方は神学上の考えに合致する。グリム童話では、伝説は別であるが、悪魔は、魔女や女魔法使い、魔術を使う女とは独立に登場する。